

「学ぶ」ということ。

6年生の学級通信「一致団結」第26号に次のようなことが書かれていました。

「合格点90点の50問漢字テストを行った。2週間程前に伝え、合格できなければ再テストを行い、合格点は100点。再テストに合格できなければ夏休みに学校で漢字の猛特訓をする。子どもたちからはブーイングの嵐だったが、テストの平均点は93点で、子どもたちはかなり努力したことがわかった。テストの裏には5年生までに習った漢字を10個書く問題を出したが、平均点は49点、習った漢字が半分しか書けないという状況だった。子どもたちには、勉強をしなければならぬ理由を話した。子どもたちの将来の夢を叶えるために自分もしっかり考えていきたい。」という要旨です。

これを読んで、担任の熱意が伝わってくると同時に、その熱意ほどに子ども自身が「学ぶこと」の意義を理解していないと感じました。(本校の児童に限らないことだと思います)

学ぶことの意義は、目的と手段という切り口で整理することもできます。例えば、知的探求心が高く、学ぶこと自体が楽しいと感じる人には「目的」です。iPS細胞の研究でノーベル賞を受賞した山中教授のように何か新しい発見をしたり、創造する人になる可能性があります。一方、希望する高校や大学に入るため、仕事を得るため、お金を得るため、のように自分の夢や希望を叶えるための手段と考えても、学ぶことは大切です。さらに、「教育を受ける権利」という視点から見ると、もっと大きな意義があることに気づきます。先日、マララ・ユスフザイという16歳の少女がニューヨークの国連本部で演説をした様子がTVで放映されました。彼女の住むパキスタンの北部山岳地帯、スワートを実効支配するパキスタン・タリバンは女性の教育権や就労権を認めていません。その強権的支配と女性の人権抑圧をメディアに告発した彼女は2012年、下校中にタリバンに銃撃され頭部に重傷を負いました。その後、奇跡的に回復し、国連で演説する機会を得たのです。「世界を変えるのは、教育こそがただ1つの解決策です。」と述べ、すべての子どもが教育を受ける権利の実現を訴えています。学ぶ機会の保証(子どもが学べること)は平和の実現にとって土台である、という意義です。

「なぜ、勉強するの?」に対して、「ふ〜ん、そうか」と子どもが納得できる答えを返したいですね。